

# ワイカート・レポートにおける「結果」について ——幼児教育カリキュラムの追跡比較研究(Ⅲ)——

北川 歳昭 加藤 泰彦  
Toshiaki Kitagawa Yasuhiko Kato

## はじめに

本稿では、アメリカ合衆国における三つの代表的なプリスクール・カリキュラム、すなわち、ディスター・モデル、ハイスコープ・モデル、ナースリースクール（保育所）・モデルを受けた子どもたちのその後の発達を縦断的に追跡したワイカート・レポート（Schweinhart et al., 1986）の核心部分ともいえる「結果」の部分を紹介し、それについて若干の批判的論評を加える。〔なお、ワイカート・レポートの意義及び方法論については、『幼児教育カリキュラムの追跡比較研究（Ⅰ）・（Ⅱ）』を参照されたい。〕

ワイカート・レポートの「結果」は、プリスクールにおける幼児教育カリキュラムが、知能や学力、社会人としての知識や技能などの知的発達の側面に及ぼした効果と、非行、学校や家庭における行動や態度などの社会的道徳的発達の側面に及ぼした効果とに大別されている。

以下に、ワイカートらの論旨に沿って、「結果」の内容について抄訳的に紹介していこう。

### 〔1〕 知的および学業的達成に及ぼすプリスクール・カリキュラムの効果

このカリキュラム研究における三つのプリスクール・プログラムは、学業不振に陥る危険性のある子どもたちに学業上必要な諸技能を身につけさせるために計画された。他の研究によると、幼児教育を受ける経験は少なくとも一時的に知的および社会的な技能を高めることができる（McKey, et al., 1985）。その知的および社会的技能とは、その後、子どもたちが学業上の達成に関して良好なパターン……つまり、子ども自身、両親および教師がそれぞれ学業上の成功に関して強く動機づけられ、関心や期待を高く持つようになるようなパターン……を確立するのに役立つ技能を指す（Schweinhart & Weikart, 1980 ; Lazar et al., 1982）。

本節では、3歳でプリスクールの幼児教育プログラムに参加してから10歳の4年生の終わりまでの子どもたちの知的達成の発達について、三つのカリキュラム群をそれぞれ追跡する。この調査は、次の2つの疑問を解明するために行われた。

- 1) プリスクール・プログラムに参加した子どもたちのIQは、幼児教育プログラムの経験のない子どもたちのそれに比べて、全期間にわたって向上したかどうか。
- 2) 三種のプリスクール・カリキュラム・モデルを受けた子どもたちは、児童期の知的達成や学業成績において、あるいは、後の青年期の社会人としての能力において、違いがあったかどうか。

#### （1.1） 知的達成に及ぼすプリスクール教育の全般的効果

三つのプリスクール・プログラムに参加した子どもたちのIQは、少なくとも10歳まで統計上有意に

高い水準のままであった (Weikart et al., 1978)。表 1 A および図 1 A は、プリスクール教育を受けなかった統制群と比べて、プリスクール教育を受けた実験群全体の全期間にわたる平均 I Q を示している。10 歳、つまり、プログラムが終って 6 年後の実験群全体の平均 I Q は、3 歳の時よりも 16 ポイント高く、統制群の 10 歳時の平均 I Q よりも 9 ポイント高い。しかし、統制群は実験群よりも、ずっと不利な条件下にあったことを留意すべきである。幼児教育を受けたことによる子どもたちの I Q の上昇は、期間を通じていくぶん下降しているものの、10 歳の時点でも有意に高いままであった。

実験群のスタンフォード・ビネー I Q は、プログラム開始 1 年目に 27 ポイント、つまり 78 から 105 へと劇的に上昇した。つまり、教育上の危機にある子どもたちを全国平均の 100 よりも高い水準に持ち上げたのである。プログラム 2 年目の間に I Q 値は、この高い点から 7 ポイント下がり 98 になったが、それでも全国平均に近い水準を維持している。小学校入学後数年の間に、I Q はわずかに低減したが、10 歳の時点で依然として 94 (WISC) であった。この集団平均値の推移は、知的能力の安定した向上を示している。なお、I Q は 10 歳以降測定されていない。

統制群の平均 I Q は、3 歳から 5 歳までに 5 ポイント上昇したが、これは平均への回帰、つまり、テスト得点が低いという理由でその子どもたちが選ばれたために生じた統計上の回帰現象であろう。統制群の平均 I Q は、幼稚園の 1 年間に、学校教育という初めての知的経験によってさらに 3 ポイント上昇した。7 年間にわたる変化は、実質 6 ポイントの上昇になる。つまり、3 歳時の 79 (スタンフォード・ビネー・I Q) から 10 歳時の 85 (WISC・I Q) まで増加したのである。

(1.2) 知的達成に及ぼすプリスクール・カリキュラムの効果

カリキュラム群の平均 I Q を群別に表示すると、表 1 B および図 1 B のように 3 群間の差が極めて小さい

表 1 各群の I Q の推移 (A: 実験群と統制群, B: カリキュラム 3 群)

年齢	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	10 歳
	プリスク ール以前	プリスク ール 1 年目	プリスク ール 2 年目	キンダー ガルテン	小学校 1 年	小学校 2 年	小学校 4 年
<b>A</b>							
カリキュラム群	78	105	98	96	95	91	94
統制群	79	83	84	87	87	87	85
<i>p</i>	—	<.001	<.001	<.001	<.001	<.10	<.01
<b>B</b>							
ディスター群	79	107	104	99	97	91	97
ハイスコープ群	77	106	97	97	92	92	92
ナースリースクール群	79	102	92	93	95	90	91
<i>p</i>	—	—	<.01	—	—	—	—

註 数値は I Q 平均値。分散分析による群差の確率水準は、10% 以下の場合のみ記述。サンプル数は、カリキュラム群が 4 歳の 43、10 歳の 29 を除き、あとすべて 54。統制群は 4 歳の 44、10 歳の 53 を除き、残りすべて 59。3 歳から 8 歳までの I Q はスタンフォード・ビネー、10 歳のときは WISC による。

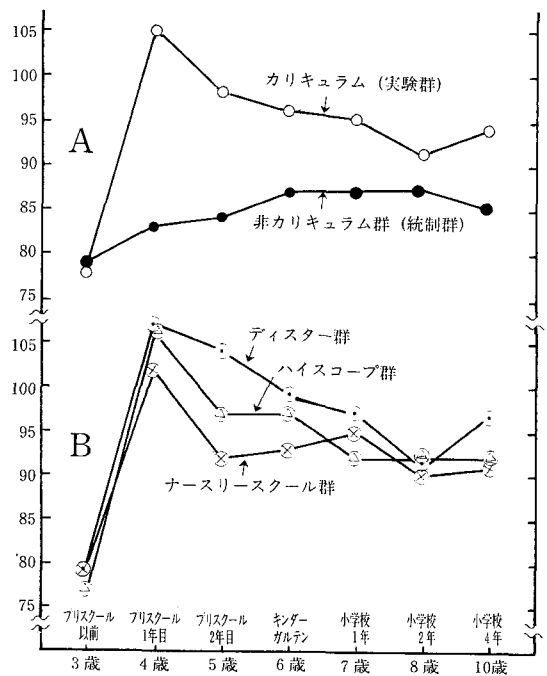


図 1 各群の I Q の推移 (A: 実験群と統制群, B: カリキュラム 3 群)

ことがわかる。プログラムの1年目に、平均IQは、いずれも23ないし29ポイント上昇したが、これは子どもたちを危険状態から救い出したことを意味する。プリスクールの2年目に、ハイスコアープ群とナースリースクール群の平均IQは、9ないし10ポイント降下したが、それに対し、ディスター群はただ3ポイントしか降下しなかった。ディスター群が他の2群よりも統計的に有意な知的優位を示したのは、この5歳の時だけであった。幼稚園以降、実験群の3群は平均IQに差がなく、90から100の範囲に安定した。対照的に、統制群の学童期の平均IQは、85から90の範囲であった。

三つのカリキュラム・モデルを比較すると、それらに子どもの知的達成を向上させる効力の差があるという証拠は乏しい。平均IQを比較すると、ディスター・モデルを受けた子どもは、2年間のプリスクール経験をした後の5歳時のテストで、他の2群よりもよい成績であった。しかし、4歳から10歳までの期間全体の平均IQを見ると、ディスター群97、ハイスコアープ群96、ナースリースクール群94であり、三つのカリキュラム群間に有意な差は認められない。

### (1.3) 学業的達成に及ぼすプリスクール・カリキュラムの効果

学業達成度を測定する尺度は、1年生および2年生の終りに実施されたカリフォルニア学力テスト(CAT, 低学年用形式W)の得点であった。学力テストの平均合計得点を表2の上2行に示す。各群とも2回のテスト(同じテスト様式を用いて行なわれた)の間に50ないし60ポイントの上昇があったが、群間の差はどちらの時点でも有意ではなかった。これは予測されるべきことであった。なぜなら、群間に存在した初期のIQの差異は、幼稚園の間に小さくなり、2学年までに消失したからである。ディスター群は、他の2群に対して初期にはやや優勢であったが、その優勢さが小学校における学業的達成(学力)にまで波及することはなかった。

青年期における認識能力を知るために、本研究では、「成人達成レベル調査」(Adult Performance Level Survey: APL)が用いられた。この調査は、実社会の問題を解決したり、成人としての生活に対処する際に必要な認識能力を測定するものである。3群のAPLの合計点と各尺度毎の得点を表2に示す。平均値では、ディスター群が、APLの11尺度のうち9尺度において最も低く、職業の知識においては統計的に有意であり、筆記技能に関しても傾向差が認められた。

表2 学力と認識能力：カリキュラム3群の比較

変数	ディスター群	ハイスコアープ群	ナースリースクール群	p
学業達成度(CAT)				
7歳時の学力	100	102	106	—
8歳時の学力	160	167	154	—
15歳時の認識能力(APL)				
全40項目	15.1	17.7	18.4	—
知識内容下位尺度				
地域の社会的資源(8項目)	4.0	4.6	4.4	—
職業上の知識(8項目)	2.4	3.7	3.7	.04
消費者としての経済知識(8項目)	3.0	2.8	3.4	—
健康(8項目)	3.1	3.6	3.8	—
政治および法律(8項目)	2.6	2.9	3.1	—
技能下位尺度				
事実および用語(8項目)	1.7	2.2	2.2	—
読書(8項目)	3.4	3.2	4.2	—
筆記(8項目)	3.4	4.7	4.6	.06
計算(8項目)	2.8	3.0	3.2	—
問題解決(8項目)	3.8	4.6	4.3	—

註 サンプル数は、7歳時が64、8歳時が65、15歳時が55である。数値は平均値。分散分析による群差の確率水準は、10%以下の場合のみ記述。

## 〔2〕社会的行動に及ぼすプリスクール・カリキュラムの効果

15歳時の自己報告に基づき、プログラムに参加した子どもの少年非行と他の社会的行動の側面を調査した。これらの資料によると、ディスター群は、他の2つのカリキュラム群の2倍多く非行を犯しており、器物破損は5倍多く、薬物乱用や家出などの地位義務違反は2倍多かった。他の社会的行動の領域でも一貫して、ディスター群の社会的達成が相対的に低い、というパターンである。すなわち、ディスター群は、家族関係が希薄で、スポーツに参加した割合や学校の委員の仕事に任命された割合が低く、教育上の達成への期待が低く、個人的問題で他者に助けを求めることが少なかった。大部分の変数で、ハイスコープ群はディスター群と好対照をなし、社会的行動が比較的良好であった。3つのカリキュラム群は、雇用や所得に関した領域、自尊心や統制の位置 (locus of control) の測定値に関しては互いに類似していた。

## (2.1) 少年非行に及ぼすプリスクール・カリキュラムの効果

ディスター群は、非行行為を平均13回犯したのに対して、ナースリースクール群は7回、ハイスコープ群は5回にすぎなかった(表3)。18項目の尺度のうち1項目を除いて他のすべてにおいて、ディスター群の非行の回数は、3群のうち最も多いか、他の高い群と同じであった。

18項目の非行尺度は、5つの下位尺度に分けられる。すなわち、対人暴力、器物破損、窃盗、薬物乱用、および地位義務違反である。

下位尺度ごとに比較すると、対人暴力では、ディスター群は他の2群の2倍多かったが、この群差は統計的に有意ではなかった。ディスター群は、対人暴力の5項目すべてにおいて、3群のうち最も回数が多かった。

ディスター群の器物破損は、他の2群の5倍多かった。つまり、ディスター群では、一人当たり、1.7回であるが、他の2群では一人当たり0.3回にすぎな

表3 15歳時に自己報告した非行行為：カリキュラム3群の比較

変数	ディスター群	ハイスコープ群	ナースリースクール群	p
非行尺度(全18項目)	12.83	5.44	6.94	.04
下位尺度及び各項目				
対人暴力	2.28	0.88	1.17	—
教師または監督者への殴打	.39	.06	.00	—
学校や職場での深刻な喧嘩	.72	.28	.56	—
集団抗争への参加	.44	.22	.11	—
他者への重大な傷害	.50	.28	.50	—
何かを得るための武器の使用	.22	.00	.00	—
器物破損	1.72	.28	.39	.04
放火	.44	.00	.00	.06
学校の器物破損	.83	.29	.39	—
職場の器物破損	.22	.00	.06	—
窃盗	3.06	1.72	2.22	—
50ドル以下の価値の物の窃盗	1.17	.72	.89	—
50ドル以上の価値の物の窃盗	.44	.11	.17	—
店からの盗み	1.00	8.3	1.00	—
車の盗み	.00	.06	.06	—
車の部品の盗み	.28	.00	.11	—
何かを得るための武器の使用	.22	.00	.00	—
薬物乱用	3.17	1.06	1.89	.06
マリファナ喫煙	2.06	.78	1.39	—
他の不法薬物の使用	1.11	.28	.50	—
地位義務違反	3.04	1.56	1.22	.04
親との口論および喧嘩	1.94	1.11	1.00	—
家出	.38	.17	.00	.02
家宅侵入	.72	.28	.22	—

註 サンプル数は各群とも18で、計54。群差は分散分析による。P値は.10以下の場合のみ記述。尺度は、項目得点の合計である。項目は、「あなたはかつて～したことがありますか」という質問に対して、なし-0、1回ある-1、2回ある-2、3、4回ある-3、5回以上ある-4で回答する。武器の使用は、対人暴力と窃盗の下位尺度に含まれている。

い。ディスター群は、その下位尺度の3項目すべてについて、3群のうち最も回数が多かった。特に放火における群間の差は大きく、統計的有意水準に近かった。窃盗の回数では、群差は有意ではないものの、6項目のうち4項目で、ディスター群は、他の2群よりもわずかに多かった。

ディスター群は、マリファナや他の非合法薬物の使用である薬物乱用行為が他の2群より2倍多かった。ディスター群は、また、我々が「地位義務違反」と名づけた、両親との争い、両親への暴力、家出などの行為において、他の2群の2倍多かった。特に、家出については統計的に有意な差があった。

15歳の時点で調査された公式の少年非行の回数では、3群間に明確な統計的な有意差がなかった。

ゴールド (Gold, 1970) も、同様な発見を報告し、15歳の少年について自己報告した非行に群間の差があっても、逮捕された場合にはその差がはっきり出ない、としている。カリキュラムの差にかかわらず、全メンバーの半数は、15歳までに警察に補導されたり逮捕されたりした経験があると報告した。つまり、追跡対象となったカリキュラム参加者は、平均して2.2回停学になったことがあった。

図2は、非行行為の頻度について3群ごとにその人数を示している（パーセントの代わりに人数を用いたのは、群の人数がたまたま同じだったからである）。各群は、非行を5回以下しか犯さなかった人数についてはほとんど差がないが、ディスター群の18人のうち8人——ほとんど半数——は、16回以上の非行行為をしていた。それに対して、他の2群で16回以上であったのは、合計しても36人のうちの3人（8%）だけであった。

**(2.2) その他の社会的変数に及ぼすプリスクール・カリキュラムの効果**

表4は、家族関係、課外活動、学校への行動と態度、および精神的健康の領域の項目について、カリキュラム群の15歳の時の回答を示している。少年非行で見出されたことを裏書して、これらの領域においてもディスター群に問題が多いことを示唆している。

家族関係の領域で統計的に有意な群差があったのは、「家族の者たちは自分のことをあまり思っていない」と言っている者が、ディスター群では3人に1人の割合であるのに対し、他の2群では合わせて36人中1人にすぎなかったことである。同様に、統計的に有意ではないが、「自分は家族たちと仲良くやっていない」と答えた者が、ディスター群では5人に1人の割合であったのに対し、ハイスコープ群では1人もいなかった。また、「家計収入に貢献している」と答えた者の割合は、ハイスコープ群が3人に1人であるのに対し、ディスター群が6人に1人であった。ディスター群の非行行為の割合が実際に高いということからすると、家族関係が稀薄な者が多いことは驚くべきことではない。家庭に関係した事からでは、15歳時点で、54人中2人はすでに自分の子どもがいる、と報告した。

課外活動の領域で群差が大きかったのは、スポーツへの参加においてである。すなわち、ハイスコープ群のほとんど全員がスポーツに参加していたのに対し、ディスター群では半数以下であった。ハイス

累積人数	ディスター群	ハイスコープ群	ナースリースクール群	累積人数
18	26-45回 2人	16-25回 1人	16-25回 2人	18
17				17
16	16-25回 6人	6-15回 8人	6-15回 6人	16
15				15
14				14
13	6-15回 3人	1-5回 4人	1-5回 4人	13
12				12
11	1-5回 2人			11
10				10
9				9
8				8
7				7
6				6
5				5
4	0回 5人	0回 5人	0回 6人	4
3				3
2				2
1				1

**図2 15歳の時点で報告された非行行為の回数：カリキュラム3群の比較**

注 サンプル数は、各群18名ずつ、計54名。ディスター群の26-45回の2ケースの非行行為回数は26回と45回であった。45回のケースは、継続的食料配給を受けない路上生活者と見なされる。

コープ群で「最近本を読んだことある」と答えたのは、ディスター群の2倍であった。ボランティア活動への参加では各群はほとんど同じで、約4分の1のメンバーが参加していた。

ディスター群では、今までだれも学校での委員や係の仕事に任命されたことがなかった。ナースリースクール群の3分の1のメンバーが学校で何らかの係に任命されたと報告したのとは大きな違いである。これは、ナースリースクール・カリキュラムが強調している社会性の発達を反映していると解釈できるが、ナースリースクール群は、研究開始の際、社会経済的に有利な点があったこと（例えば、母親の教育程度が高かった、など）を留意すべきである。これらの有利さが、学校で任命を受けた割合が多いことの原因かも知れないからだ。中等

学校以降の高等教育を受けたいと考えているのは、ディスター群が半数だけなのに対し、ナースリースクール群では3分の2、ハイスコープ群では4分の3であった。

個人的悩みの数に関して、3つのカリキュラム群の差はなかったが、ディスター群は、「個人的な問題で援助を求めたことがある」とする者が18人中2人だけで最も少なく、18人中7人のハイスコープ群と好対照をなしている。この群差は大きいですが、統計的には有意ではない。

カリキュラム群の自尊心や統制の位置 (locus of control) において差はなかった。これについて、3群間に自己への信念や態度が実際に異なっているとしても、我々が実施した自尊心の測定 (Rosenberg, 1965) では、それをうまく捕らえられなかったのではないかと、あるいは、回答者の自己への信念が質問紙の仮定するような状況や行動に一般化されなかったのではないかと、考えられる。原因認知の型を探る統制の位置の尺度 (Bialer, 1961) は、このサンプルではうまく働かず、その内的一貫性は容認しがたいほど低かった(アルファ係数=.34)。これらの重要な構成概念を確実に測定する方法が見出されないかぎり、我々は、幼児教育カリキュラムの効果の因果関係モデルを論拠を持って確信 (または論駁) する

表4 15歳時点で報告された社会的行動および態度：カリキュラム3群の比較

変数		ディスター群	ハイスコープ群	ナースリースクール群	p
家	「家族と仲良く暮らしてきましたか」				
	大変仲が良かった	33%	33%	28%	
	かなり仲が良かった	44%	67%	56%	—
族	仲が良くなかった	22%	0%	17%	
	「家族はあなたのことをどの程度思っているでしょうか」				
関	大変よく思っている	0%	6%	6%	
	普通	67%	94%	89%	.03
	あまり思っていない	33%	0%	6%	
係	「家計の収入に貢献している」(N=42)	14%	33%	23%	—
課	「スポーツに参加していますか」				
	しばしば参加する	17%	50%	44%	
	時々参加する	28%	44%	28%	.02
	参加しない	56%	6%	28%	
活	「最近、読んだことがあるのは」				
	本(N=49)	31%	69%	59%	.09
	新聞	67%	89%	72%	—
	雑誌(N=53)	44%	41%	72%	—
動	「ボランティアの仕事をしたことがある」	22%	28%	28%	—
	「学校で委員や係に任命されたことがある」	0%	12%	33%	.02
学	「個人的な進学計画は」				
	高等学校以上	50%	77%	64%	
	高等学校	42%	23%	36%	—
	進学したくない	8%	0%	0%	
態	「学校教育全般への態度(19項目)」	44.3	49.3	45.9	—
	「学習への態度(9項目)」	21.3	21.5	20.8	—
	「教師への態度(10項目)」	23.1	27.8	25.2	—
精	「個人的な悩みの数は」				
	人よりも多い	17%	11%	11%	
	人並み	33%	33%	50%	—
	人より少ない	50%	56%	39%	
神	「個人的問題で援助を求めたことがある」	11%	41%	22%	
	「自尊心ローゼンバーグ尺度10項目」	26.5	28.1	27.7	—
	「統制の位置—ヒアラー尺度23項目」	14.6	13.6	13.9	—
的	「大切にしたい分野」				
	学校	44%	39%	50%	
	スポーツ	17%	39%	17%	
	家庭	11%	17%	6%	—
	友人	6%	0%	28%	
健	その他	28%	6%	0%	
	「その分野で自分の能力をどう思うか」				
	他の人よりも能力がある	24%	33%	29%	
	他の人と同じ	47%	61%	53%	—
度	他の人より能力がない	29%	6%	18%	

注 サンプル数は、特に記さない限り各群とも18で、計54。群差の確率レベルは.10以下の場合のみ表示した。パーセンテージはカイ自乗検定によって、平均値は分散分析によって、群間の差を検定した。

ことができない。

カリキュラム群間には、雇用や所得状況を反映する一連の項目において有意な差がなかった。15歳時点のインタビューで、全メンバーの26%が働いており、61%はそれまでに働いた経験があった。83%は、20代の初めに就職したいと望んでいる仕事のタイプを報告した。62%はお金を蓄めており、75%は25ドル以上の価値のあるものを所有していた。

15歳の時点で現れている群差は、全般的に、他の2群に比べて、ディスター群のメンバーの多くが自分たちは社会的にうまく適応していない、と報告していることである。ディスター群は、ある種の少年非行、特に、器物破損を含む違反行為を頻繁に行なったと報告した。たぶん、これは権威への尊敬心の欠如と怒りを表しているのであろう。ディスター群の多くのメンバーは、自分と家族たちとの関係が乏しいことを報告しており、個人的問題に助けを求めようとしていない。ディスター群のスポーツへの参加度の低さと学級の係に任命された経験の欠如は、両方とも、ディスター群のメンバーが、他の2群のメンバーよりも、様々な経路を通じて兄弟や教師からの社会的受容を求めたり受け取ったりしていないことを示唆している。

### 〔3〕ワイカート・レポートの「結果」についての考察

以上、ワイカート・レポートの「結果」を抄訳してきたが、それを概括すると次のようになるであろう。すなわち、質の良い幼児教育カリキュラムの実施は幼児の知能を劇的に向上させ、その知的側面への効果は、カリキュラム終了後、減衰しながらも数年間は持続した。カリキュラム間の比較では、知的能力の面でディスター群がやや優勢であるものの、大きな差はなかった。カリキュラム間の差は、むしろ、青年期の社会的適応の側面で顕著に現れた。つまり、3つのカリキュラム群の中でディスター群は最も社会的不適応の傾向があったのである。

さて、知的側面への効果がカリキュラム終了後しだいに減衰（または消失）するのに対し、社会的適応の側面への効果は10年後まで維持されるのはなぜであろうか。この疑問に対して、このレポートが十分に説得力のあるデータを提供しているとはいいがたい。幼児期・児童期の社会的適応の状態、青年期の知能水準、そして統制群の児童期・青年期の知能および社会的適応などに関するデータが欠けているのは惜しいことである。

カリキュラム効果の知的側面は、主にIQと学力に基づいて比較検討されているが、各モデルが教育目標としている知的発達の意味がIQや学力という一元的な尺度によって捕らえられるのであろうか。知能多因子論に基づくならば、三種のカリキュラムはそれぞれ別の知能因子に異なって影響した、とも考えられるからである。ディスター・モデルは知能のどの側面に有効であったのか、ハイスコープ・モデルはどの知的側面に特に影響したのか、ナースリースクール・モデルは果たしてどんな側面で知的能力を高めたのであろうか。また、ハイスコープ群の青年期の良好な社会的道徳的適応を支えたのは、どのような知的発達の側面であったのであろうか。幼児・児童期の知的発達と青年期の社会的・道徳的発達の関係を合理的かつ実証的に説明するためにも、三種の異なるプリスクール・カリキュラムを受けた子どもたちの知能発達に関して因子別の分析が必要であろう。

幼児期2年間の教育経験の差が10年後にも有効な差をもたらすには、カリキュラムそれ自体が持つ幼児への直接的な影響もさることながら、子どもにとって身近で一貫した教育環境としての親の影響は大

きいであろう。ワイカートらのプログラムでは、カリキュラムの構成要素として、教室での保育の他に「教育的家庭訪問」が実施された。カリキュラムの一環としての「両親への教育」による親の変化、そしてその親を仲介とした子どもへの間接的影響をもっと積極的にとらえるべきではなかっただろうか。

ワイカートらはピアジェ派カリキュラムの推進者であるので、ディスター群の 4 歳から 6 歳までの IQ 上昇をやや過小評価したきらいがあるのはやむをえないとしても、一方の立場にありながら対立的なカリキュラムをも実施し、その結果を長期間にわたって追跡し比較した度量の広さ、スケールの大きさは大いに称賛に値するといえよう。保育効果について、自己満足的な近視眼的な評価に終わってしまいがちなのが国の幼児教育の現状に、このレポートの与えるインパクトと示唆は大きいと思われる。

## REFERENCES

- Bialer, I. (1961). Conceptualization of success and failure in mentally retarded and normal children. *Journal of Personality*, 29, 301-333.
- Gold, M. (1970). *Delinquent behavior in an American city*. Belmont, CA : Brooks/Cole.
- Lazar, I., Darlington, R., Murray, H., Royce, J., & Snipper, A. (1982). Lasting effects of early education. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 47 (1-2, Serial No.194).
- McKey, R. H., Condelli, L., Ganson, H., Barrett, B., McConkey, C., & Plantz, M. (1985). *The impact of Head Start on children, families and communities (Final Report of the Head Start Evaluation, Synthesis and Utilization Project)*. Washington, DC : CSR.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press.
- Schweinhart, L. J. & Weikart, D. P. (1980). *Young children grow up : The effects of the Perry Preschool program on youths through age 15 (Monographs of the High/Scope Educational Research Foundation, 7)*. Ypsilanti, MI : High/Scope Press.
- Schweinhart, L. J., Weikart, D. P., & Larner, M. B. (1986). *Consequences of three Preschool curriculum models through age 15*. *Early Childhood Research Quarterly*, 1, 15-45.
- Weikart, D. P., Epstein, A. S., Schweinhart, L. J., & Bond, J. T. (1978). *The Ypsilanti Preschool Curriculum Demonstration Project : Preschool years and longitudinal results (Monographs of the High/Scope Educational Research Foundation, 4)*. Ypsilanti, MI : High/Scope Press.